

山崎郷土叢書

NO. 127
28.8.28
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷 司 郎

望月の欠けたる悲しみ

— 王朝女性の出産事情 —

浅田 耕三

京都の上御霊・下御霊神社は政争に破れ非業の最期をとげた人達の霊を祀る。

うらみをのんで亡くなった人たちがこの世に災禍をもたらすのをそれぞれの慰霊の神社である。災禍とは天変地異や病氣、怪我、難産等人を苦しめるすべてを包括する。

病氣や自然災害は現代人のわれわれも勿論おそろしいが、千年昔の日本人にとってはその恐ろしさは現代人の比ではなかったろう。たとえば痘瘡（天然痘）がひとたびある村に流行すると、甚だしい場合は村の人口の三分の一が鬼籍に入ったという。これという治療法もなく、人々は祈祷、呪いに頼り、痘瘡神をまつりお祓いをして難をのがれようとした。

酒湯という治療法も流行したが何の効果もなかった。お産で死亡する記録も驚く程多い。

目次

望月の欠けたる悲しみ 王朝女性の出産事情	浅田 耕三	1
「ホテルの里」やまさき（中編）	河本 雅視	3
伊能忠敬測量隊（支隊）の受け入れと経費について	鎌田 裕明	7
菅野川の外来植物	里見 亘	13
三森城跡 山麓に居館跡	竹内 克司	16
地区の話題		
ふるさと神野を考える会の活動について	山本 高則	18
段の観音堂の絵馬伝説の現地調査	片山 昭悟	19
「旧因幡街道」の石柱・山田の道標の調査	会 報 部	21
宍粟市の梵鐘（江戸時代）年代順集成（Ⅱ）	片山 昭悟	22
会員・家族の文芸		25
平成二十八年年度研修旅行のご案内・事務局だより		27
編集後記		28

『枕草子』の清少納言が仕えた一条帝の皇后定子も、村上天皇の皇后安子も、『更級日記』の作者の姉も皆二十代で出産死している。十一世紀初頭の日記類を二、三拾い読みしてみても上層貴族の女性たちの出産死のいかに多いことか。当時の女性はまさしく命をかけて出産していたのである。

この世をばわが世とぞ思ふ望月の

欠けたる事もなしと思へば

と詠んだ大権力者藤原道長の女、彰子は、一条天皇の中宮として敦成親王を出産したが、産気づくと巾帳の帷子も御簾も柱も白一色

の御帳台（貴人の寢室）に入つて身を清め、さらに産所へ移るのだが、

「御いただきの御髪おろしたてまつり御いむことうけさせたまつり給ふほど、くれまどひたる心ちに「こはいかなる事」と、あさましうかなしきに、たひらかにせさせ給ひ—

と『紫式部日記』は記す。拙い口語にしてみると、

「頭の髪を削ぎ申し上げ（道長が彰子に）御戒をお受けさせになつたので私たち（紫式部たち彰子おつきの女房たち）はかなしくて目もくらんでしまい『ああ、これはどうなることだろう。』とうろたえ嘆いていると（なんと嬉しい事に）やすやすと御出産になった、」すなわち道長は娘の髪を下ろし尼の形にして出産させた（出家して尼になれば死んでも極楽に往生できる）のである。

摂政の娘も出産は死と隣り合わせだったのだ。『小右記』という藤原実資の日記によると、彰子の妹嬉子は東宮（皇太子）の敦良親王に入内して八月三日に出産したが五日に死亡している。十九歳の若すぎる死である。

万寿二年（一〇二五）というこの年は夏から赤斑瘡（はしか）が流行し、同じく道長の女、小一条院女御寛子が二十七歳で死去、そのほか道長の近親者数人がこの悪疫で夭折している。懐妊中に、流行してきたはしかに患り高熱におかされ飲食がとれず、消耗衰弱しているから出産にとても耐えられず母子共に儂くなってしまうのだ。「望月の欠けたる事もなし」どころではない。欠けっぱなしのかなしみにおそわれていたのである。

また、天皇の後や女御、高級貴族の北の方には早婚と多産ゆえの

わざわいもあった。その一例を挙げると道長の次子教通の妻、藤原公任の女は十三歳で結婚、十五歳で長女を生む。今風にいえば満十二歳、小学六年生の結婚、そして満十四歳、中学二年生の出産である。

その後十七歳で次女、十八歳で三女を流産、十九歳で長男、二十歳で次男、二十三歳で三男、二十四歳で四男と次々出産したが、四男の産後の肥立ちが悪く二十五歳で亡くなってしまふ。『小右記』の記述である。

天皇家や貴族の家庭では無事子供が生まれるとまず乳母を雇って授乳させる習慣だった。産婦は授乳しない。授乳していると懐妊しないと考えられていた。一人でも多くの子供を産むのが当時の貴族女性のつとめであった。天皇に皇子が生まれると一人の皇子に四人の乳母がついた。これは律令の定めであった。普通の貴族は一人の乳児に一人の乳母であった。

冒頭の御霊神社の祭神の一人は、当地桓武伊和神社にゆかりのある早良親王である。

藤原種継暗殺の容疑者として捕えられ淡路へ流刑になる船中で自死した。無実の罪をさせられた抗議のため食を断つたと伝わる。

その後、自然災害が次々世を襲い、また、桓武帝身内の何人にも不幸がつづいた。

かくて帝は、親王の霊を丁重に弔い、墓所も改められ崇道天皇の尊号まで贈られたが災禍はなお治まらず、ために長岡京は僅か十年で幕を閉じた。

参考 『紫式部日記』 岩波文庫

『平安朝の母と子』 服藤早苗著 中公新書

『藤原道長の日常生活』 倉本一宏 講談社現代新書

「ホタルの里」やまさき（中編）

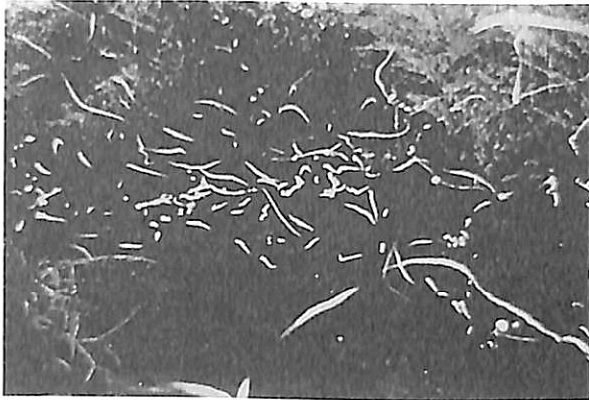
河本雅視

四、ホタルはどんな一生でしょう

はじめに

平成二十八年の今年も山崎の各地の河川では沢山のゲンジボタルの光の乱舞を観賞することができたとおもいます。特に今年は例年より一週間ほど早くから飛び立ち、また、例年より多くのホタルが見られました。葛澤地区のお方から伊沢川の様子をお聞きし、また、土万地区のお方からも志文川での様子もお伺いしました。どちらも今年は多かったです。

しかし一方では山崎町で一番沢山見られていた、春安橋の上下流のホ



ホタル乱舞写真「菅野川のホタル乱舞」

タルは、残念ながら橋のたもとに設置された水銀灯の明るさによって激減したことを嘆いておられる方もいらっしゃいました。また近年は川沿い近くの防犯灯も増え、明るくなって来ましたが、ホタルにはやはり影響があります。できれば防犯灯設置の場合、川の方へ光がいかない工夫が必要かと思えます。

ホタルにとってライトは禁物ですが、特に壊滅的な影響を受けているのは、黄色味を帯びた光のナトリウム灯です。青木を通る中国縦貫道にそのナトリウム灯が並木のように点灯されていて、百米ほど離れている菅野川にその光が届く処には、ホタルは殆ど見られなくなっていました。かつては、竹藪が壁になっていて、最高のホタルのポイントで、数千もの光の明滅が見られていた所ですが、残念なことです。このナトリウム灯は昆虫を寄せつけないと言われています。

ところで、私たちが見かけるゲンジボタルは、六月上旬に光を明滅しながら、夜の川面を飛んでいる親ボタルの姿ですが、昼間はあまり見かけないので、ホタルの一生はよく知られていませんでした。昔は、道端のヨモギなどの草の葉の付け根に、一センチ余りの泡が付いています。その泡の中にある小さな虫を「ホタルの子だよ」と間違えて教えられていました。この虫はアワフキムシという、ホタルとは全く違う昆虫です。

では、ホタルの一生はどのようなものでしょう。

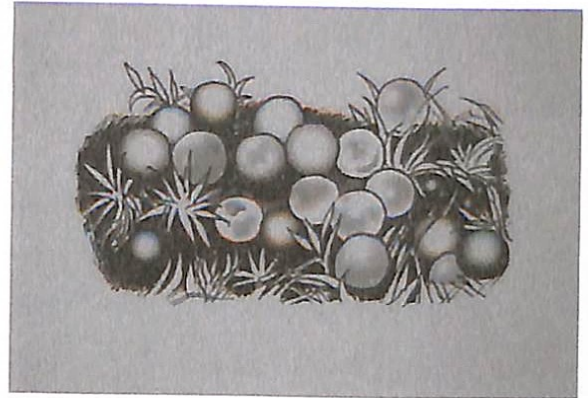
①産卵の場所と卵について

現在山崎では、ゲンジボタルは五月下旬から六月にかけてホタル

のシーズンを迎えますが、成虫のオスのホタルは飛翔しながら、だいたい二秒の周期で一斉閃滅をし、川面を飛び交いカップルを採っています。一方、メスのホタルは一斉閃滅に参加せず、草むらで明滅しています。オス・メスが光で交信をしながら相手を探し、オスが近づくと強く光り、カップルが成立して、その後メスは産卵します。

しかし、どこにでも産卵するのでなく、川や溝の清流近くの岩や石垣に生えたコケなど、また川岸の日陰の木についたコケや、草むらなどの必ず湿った場所を選び産卵します。そしてこの時、一匹のホタルが直系0・5ミリほどの卵を約400〜500個ほどコケに産み付けます。《ヘイケボタルは100個ほど産卵》肉眼では見えないほどの大きさです。ルーペ（虫眼鏡）で見るとコケに産み付けられた卵がよく見えますが、卵は真珠のように見えます。日が経つと、だんだん内部が黒みをおびてきて、十日余り経った卵を真つ暗闇で見ると、うっすら光る様子もわかります。息を吹きかけ刺激を与えるとよく光るのが分かります。

次に、卵は産卵後二十日ほどすると孵化します。黒ずんできたのは卵の中で幼虫が育っていたからです。孵化した稚幼虫は、今度は水中へと移動します。



卵の絵図 「真珠のようなホタルの卵」

② 幼虫時代とその様子

ホタルは幼虫時代を水中で過ごします。地上で孵化した幼虫は水中へと入って行くわけですが、産卵の時、川岸の湿ったコケなど清流近くを選んで産卵するのはそこにあつたわけです。

ところで、孵化した時の稚幼虫の大きさはこれも小さく、糸針金を二ミリほどに切った大きさです。これが川の流れへと入っていかねばなりません。流れの上に出た木や岸辺のコケで孵化した幼虫は好都合ですが、しかし、自然界はそんな好都合な場所ばかりではありません。流れから少し離れて孵化した稚幼虫は、六月の太陽の下では心配です。ここで自然界の素晴らしさに気が付きました。稚幼虫は水が動くとき体を丸め、円形になって水面に浮く性質があることがわかりました。そして、この頃はちょうど日本では梅雨期ですし、また時々雷雨もあります。その時までコケの中や草の根っこでジッと待っていた稚幼虫は、雨の流れと共に川へ流れ込むというわけです。

川へ流れ込んだ稚幼虫はエサとなるカワニナの多い処で沈んでいきます。そういう勘がはたらくわけは本能としか言いようがありません。

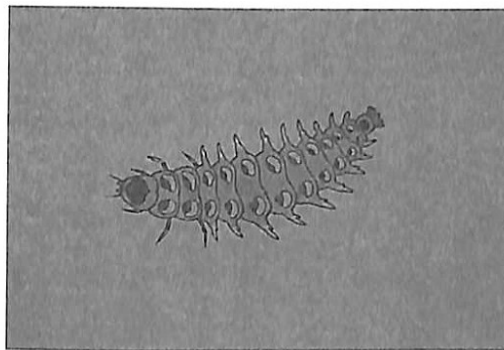
③ カワニナ

次に幼虫のエサになるカワニナですが、これも自然界はよくできている、ホタルが稚幼虫の頃は、丁度そのころ、親カワニナは粟粒（約一ミリ）ほどの稚貝を一匹が一日に二十個ほどずつ生み落とし、一年間に三千個ほど生み落とすといわれています。ですから稚幼虫

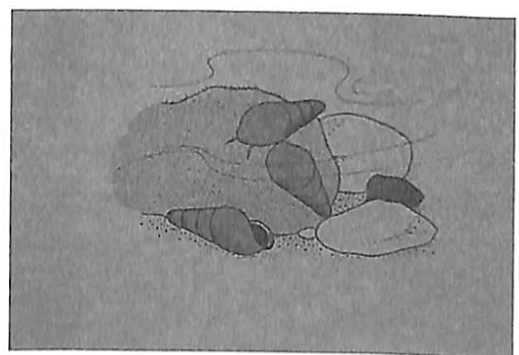
のホタルには自分の体に合った大きさの稚貝に食いつき食えることができます。しかもこの頃、川の中にはたくさんの稚貝が生み落とされています。エサの宝庫です。

④ 成熟幼虫

川に入った幼虫は自分の成長に合わせて、逐次大きくなっていくカワニナを食べていきますが、この間ホタル一匹が一生の間に、カワニナを三十匹余り食べるといわれています。そして、五回の脱皮を繰り返して翌年三月には三センチほどの成熟幼虫となります。



幼虫の絵図
「ゲンジボタルの成熟幼虫」



カワニナの絵図
「浅瀬の石の藻を食べるカワニナ」

成熟した幼虫は、三月の下旬頃、つまり、水温と気温が同じ温度になった頃、しかも雨上がりの土が軟らかくなった時、多くの成熟幼虫が尾部の光を灯しながら一斉に上陸して土の中へ二〜三センチ潜り、土で繭のようなもの（土繭）を作り、その中で半透明の蛹まぶたになって過ごし、五月の下旬羽化して成虫の親ボタルとなって飛び立

っていきます。

⑤ 幼虫時代とさなぎの時代の発光

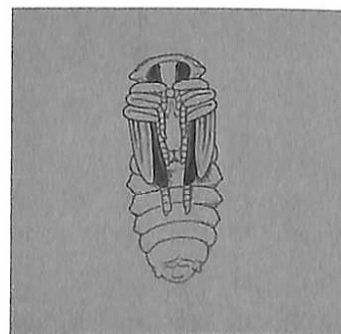
ゲンジボタルとヘイケボタルを飼育中のことですが、前に卵の時代の発光を説明しましたが、ホタルは幼虫時代も光ります。尾部の上面二部が光るのですが、飼育の水盤に稚幼虫五百匹ほど入れ、真夜中に暗闇の中で光る光景を見ると、丁度満天の星空を見るようで見事なものでした。そっと水盤を動かすなど刺激を与えると一層強く光りました。

また、蛹の時期にも土繭から取り出してルーペで見ると半透明の体が、尾部の発光の光で体全体が黄緑色に光っているように見えて、まさにこの世のものとは思えない感動でした。

これらの蛹は二十日ほどすると最後の脱皮をして翅はねの白い成虫となり、それが黒くなって、五月下旬から六月上旬にかけて土の中から顔を出して飛び立っていきます。

⑥ 大洪水時濁流に飲まれるホタル

今から数十年余り前のことですが、揖保川の支流菅野川でのことです。梅雨の雨が降り続き、そこへ豪雨が来て大洪水となりました。この洪水でホタルはどうしているだろう、流されはしないかと気になり、観察ポイントの一角所へ、雨が小降りになった夜中、一人車で行ってみました。ライトの明かりで岸边に打ち寄せる濁流がよく



蛹の絵図「ゲンジボタルの白い半透明の蛹」

わかります。ここは、対岸が竹藪、手前は旧道で車や人影は全くなく、ライトを消すと暗闇の世界、見えるのは無数のホタルの光と濁流音です。

濁流は岸高くまで来ていましたが、ホタルは濁流より上へ上がり、岸の草や低木の茂みに避難し、明るく明滅していました。濁流を前にしてその光景に見入っていますと、上流から光がスーッと一筋流れてきます。そしてまた一筋、そしてまたと見ているとその光は濁流からパツト空中へ飛び立つものがあり、よかったとホットする時もありましたが、そのまま濁流に飲まれて行ってしまうものもありました。なぜ流されるのかとジッと見ていますとホタルは飛び立つ時少し降下しながら飛び立っているのです。水面近くの葉にいたホタルは残念ながら波に飲まれてしまうことがわかりました。

雨上がりのホタルの光は磨かれたようで一層強く光っていました。

⑦ ホタルの歌から

「ホタル来い」の歌は幼少の頃からよく聞かされた歌で殆どの方は聞き覚えのことと思いますが、歌詞を記してみます。

ほう ほう ホタル来い

あっちの水は苦い (にがい) ぞ

こっちの水は甘い (あまい) ぞ

ほう ほう ホタル来い

山路 (やまみち) 来い

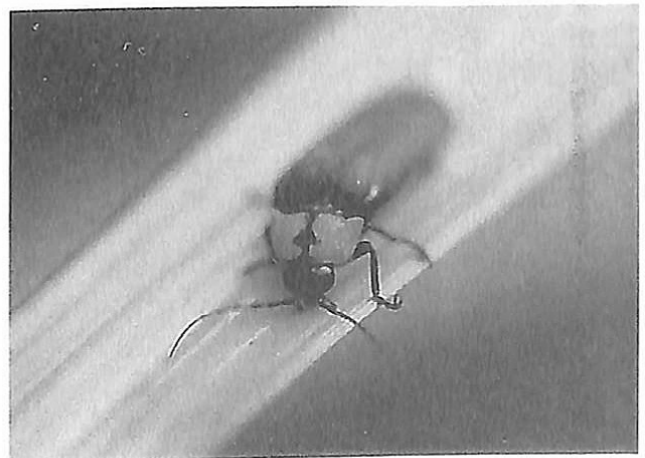
行燈 (あんど) の光でまた来い来い

この歌は江戸時代から親しまれている童謡で、蛍狩りの時歌われていた懐かしい歌と言われている。

ところで情緒の無い話になりますが、成虫になったホタルは何も食わず、ただ夜露など水滴をとって約二週間ほど生きています。そこで、実験室でホタルを飼育していた時、真水以外ではどうだろうと、真水の他に砂糖水、塩水、酢水を、どれも飲み頃の濃度と、そ

れを二倍に薄めた液を用意して、出始めた頃のホタルを数匹ずつ、コケを敷き詰めた籠に入れ、夕方、噴霧器で各液を噴霧してみました。結果は塩水が一番早く二三日までに死に、長生きしたのは真水よりごく薄い砂糖水の方で二十日も長生きしました。ホタル来いの歌はその通りであり、作者に感心しました。

砂糖水の一滴を葉の表面に落とし、ホタルをその近くに置いてやると気付いたホタルは懸命に飲みはじめます。写真を撮るのに好都合です。



ホタルの写真「砂糖水を飲むホタル」

高下から山崎までの

伊能忠敬測量隊(支隊)の

受け入れと経費について

鎌田裕明

一 はじめに

伊能忠敬測量隊の支隊が南光町の三河から山崎に向かった日。

文化十(一八一三)年十二月二十五日は、街道筋の村人、特に庄屋や百姓代たちにとっては緊張と新奇なものへの期待で、待ち続けていた日でした。新暦二月十四日、立春が過ぎたとはいえ、粉雪混じりの北風に身体中が凍えるような日でした。支隊長永井甚左衛門は天文方手付けの伊能忠敬を補佐する副隊長格で支隊を統率していました。

支隊の一行は、「乃井野を通り、土万村そして土橋六間の鷹巣川を渡り、葛根を経て切窓峠を越えて、青木村、高下村などを経て、加生村、門前村門前町に入り、左に赤松家の城跡を見ながら山崎村山崎町へ、次いで左に八幡宮がある。西新町、本町を過ぎると、右手に本多肥後守の在所の、正面の大手がある石高は一萬石、駅場がある。山田町には一宮道への分岐点がありここで打止めとする。本日は三里十五町三九間(約十三キロ)を測り、七つ時(午後四時)宿である本町の橋屋佐兵衛宅に着いた。」

『伊能忠敬測量日記』(註1) 現代文拙訳

伊能忠敬測量隊支隊は二十五日山崎泊、二十六日神戸の須行名泊

と二泊三日で安栗市南部を通過した。

さて、小論では、第一に、測量隊支隊への安栗の村役人と百姓の対応と受け入れ(註2)、第二に経費について、若干の整理とまとめを試みたい。その際、播磨山崎での歴史の一コマを、地域の文化の内質を問いながら、いわゆる小さな歴史が大きな歴史の中でどのような意義を持つかにも触れたい(註3)。この二点以外の諸テーマ、即ち、忠敬先生の経歴と人となり、「大日本沿海輿地全図」完成までの経緯、測量の方法などについては渡辺一郎、小島一仁、保柳睦美などの該博な知見と緻密な考証に基づいた著作に委ねることとし、更に進んで、共感と感動を期待する方には史実とフィクションを高度に融解し昇華させ、高齢化社会における理想の人間像を描き出している、井上ひさしの『四千万歩の男』のご一読をおすすめしたい(註4)。

二 村役人と百姓の受け入れについて

文化十年閏十一月二十八日、高下村庄屋哲三郎は加生村の庄屋善大夫とともに、「天文方御通行に付き道筋御案内御本陣用達」をいっつけられた。一ヶ月先に迫っている天文方巡廻への準備の始まりです。

それは哲三郎が幕府の老中、越後長岡藩主牧野備前守からの関係の藩主への「測量に差し支えのないよう計らうこと」という通知をふまえつつ、天文方手付け伊能忠敬からの測量予定地村役人への「先触」(註5)に基づいて「本陣御用達」としての受け入れ実施計画を作成し、測量隊を出迎えてから次の村へ引き継ぐまでの測量隊の

動きを寸分なくカバーし、手配に遺漏無きを期すことでした。すでに測量隊を受け入れた赤穂や竜野、予定地の平福、初発地の雲州諸藩の村へ文書を送達し、人を送り、参考事項を入手する準備を含む情報のまとめを第一に、第二には物品の購入、第三に山崎宿泊の十二月二十五日だけでもざっと延べ一五〇人が必要な動員計画、第四に会計、他に庶務、渉外など事務の担当者の組織づくり等業務は限りなく多かつたと推測されます。また、事後になりますが、郷町併せて二一五八軒の天文方御通行の道筋にある傘下の家々へ、村役人を通じて入用経費割り当てをするのも大仕事です。

いきなり「御本陣御用達」という在地の誰もが経験したことのない、そして山崎藩より上位の幕府事業の、円滑な推進の在方責任者ということですから、任じられた哲三郎と善大夫の驚きや当惑は容易に理解できます。

準備の内容は便宜上、(1) 測量に特化されたもの、(2) 労役にかかるもの、(3) 重要人物VIP(ビップ)対応、例えば幕府からの行政監察使である巡見使対応に準じるもの、と三大別します。二の(1) 測量に特化される準備と衣食住関係(以下の準備関係資料は「藩庁から村役人への通知」、「御役人取計覚」、「覚日記」、「赤穂表からの振合」等に拠って整理しました。

新風呂3、浴衣・晒し手ぬぐい8、中盥3(底直径1尺5寸)、大半切り2、衣桁1、風呂場に手ぬぐい1、寝所床に白木三宝2、本陣の間ごとに「東」「西」「南」「北」の紙を貼る。机10脚、硯箱3、そろばん8、滞在中は弁当必要の有無と数の確認、領分境への小屋かけ、梵天竹(長さ二間、周り5寸、節をよく取る)30、

駕籠看板・お道具持ち人夫の紺合羽は前役所から引き継ぐ。薄縁一〇枚、毛氈二枚、かけや1挺、筵二〇枚、茶・煙草盆、四つ割り三尺位杭56本、赤合羽を泊まり人足へ、青塗り合羽を駕籠人足へ

二の(2) 労役の人夫の数

案内8、荷物受け払い3、荷物積みもり34、宰領15、人廻し15、人夫頭2、御領分ごとに辻固め取り締め2、帳元・箒持ち・先払い各2、木谷渡瀬・御名渡瀬・伊沢川渡瀬及び出石船場御通行時は各人足4〜5人、出石では高瀬舟2艘、人足4人ずつつける。鍛冶1、大工1。給仕(町内子供)6。測量隊からの特注として、梵天持ち6、台持ち1、鎖持ち4、箱持ち・たばこ盆持ち・竿持ち・床几持ち・かます持ち・両掛け各1、刀持ち6、乗り物4、先払い2

二の(3) 重要人物VIPへのもの

台所は制禁書付け差し出す、料理方役割名前取り決めること、清水口橋際盛り砂両脇一対ずつ、東西木戸盛り砂・銚子桶、御通り筋町内盛り砂、御本陣前盛り砂手桶・御紋付き幕内及び宿札。出火に備え大雲寺を避難所とし、駆け付け人足30人用意。置き火燧(必要数)、土橋御門・中御門・熊鷹御門ご通行時は通路差し止め。

測量隊の山崎での日程が終わったとき、支隊統率者は「丁寧なることよし」とご機嫌よく安志へ向かった、と哲三郎は書いています。二の(4) ひとつのまとめ

本事業を万事遺漏無くやり遂げることが出来た要因を私なりにまとめておきます。第一は社会の安定と豊かさです。道筋が荒れ果て、農村が荒廃しているは手伝人夫の動員も出来ません。情報の入手に

も齟齬を来すことも多いと思われる。事業が目に見える結果をもたらさず、直接的な実益から遠い測量事業が人びとのインセンティブをかき立てると思えません。第二は「御本陣御用達」哲三郎と善大夫への百姓達の信頼です。このことは『天文方御巡回覚日記』（以下『覚日記』とする）に見られる誠実な記録や関係者との対応、『天文方入用郷町差引帳』（以下『差引帳』とする）の記録と経費処理、そして比例配分を伴う計数処理を見ると、二名の「御用達」の知的技術の蓄積（註6）の大きさを感じます。誤解を恐れず更には、播磨国の山崎で総経費3貫746匁3分5厘（現価換算1500万円）の後述する測量事業を支える文化的基盤があったということに注目したいのです。この文化的基盤が、日本が明治維新後38年でロシアに勝利し、太平洋戦争の敗戦から45年を経てGDP国民一人あたりの額がアメリカを抜き世界1になったことに深く関わっているように思うのです。（註7）

三 経費について

『差引帳』によれば文化十四年十二月の支出は貳貫四百七十四匁三分、これに諸経費付け落し分を加えると次のようになっていきます。

支出総額	貳貫五百四拾壹匁五分貳厘
収入	
藩主より	壹貫六百八匁壹歩
天文方の払い	百八拾六匁六分
差し引き	七百四拾六匁八分貳厘の不足

この段階での公の負担率は七〇%
 ここでの赤字はどうなるのか、答はこの四年後の『差引帳』が語っています。

即ち文化十四丑年十一月には、先の不足額に四年間の利子が付き、更に一部未払い分を加えると、未払い総額は

一貫九百五十一匁六分五厘となりました。

これを郷町の負担で精算することにしたのです。郷町の総軒数で比例配分して負担額を算出すると、

一軒当たり九分四毛三七九となります（註8）。

註に示す通り、四桁と六桁をかける正確な計算には、担当者たちの確かな実務能力が光っています。これにより郷町の負担額が決められたのです。徴収額は『測量方入用郷町割合』に記された通りで、この年の十二月二十日迄に山崎村庄屋迄納めるように通知されています。決済が完全に済まされたかどうかを語る資料はまだ見あたりません。

負担額は

郷方	一貫四百九十五匁一分四厘	(一六五四軒分)
町方	四百五十五匁八分一厘	(五〇四軒分)

四 千五百万円のプロジェクト

さて、ここで、天文方御巡回に係る山崎藩郷町の世話人たちが総

経費や負債額をどのように捉えていたかをまとめ、あわせてその額は現代の金銭感覚ではどの程度の額になるかを見てみましょう。

文化十年十二月のメでは総支出額は、二貫五四一匁五分二厘、藩の下賜金及び天文方からの支払いで尚残った債務は七四六匁八分二厘。四年後の債務合計は、未払い金及び金利等を併せ、渡し過ぎと利戻りを減じると一貫九五一匁六分五厘。従って「御本陣用達」哲三郎の捉えた総経費は三貫七四六匁三分五厘となります(註9)。これは上月村と寄延村が天文方受け入れに要した額十一貫六三匁一分一厘に比べて少なく(忠敬本隊十二名への対応であったからか)、天保九(一八三八)年四月の巡見使の受け入れ時経費三八八匁八分(註10)に比べると多い額です。

忠敬測量隊関係経費を現代の貨幣価値に換算してみましよう。江戸時代の通貨換算については二つの考え方があります。一つは米価をもとにして考える方法です。米価は一石一両という原則があり、これをもとにして経済状態に応じて変動する米一石当たりの銀貨との交換比率をもとに換算します。すると、米一石の現在の米価が換算値に跳ね返るので、一両は五万円〜九万円となります(註11)。

そこで、第二の考え方として職人の日当を、今日の職人のそれと比較しながら換算する方法が考えられます。これは労働価値を比較の基準に据えるという意味を持っています。この方法によって考えてみたいと思います。文政十二(一八二九)年、山崎で屋根葺きなど諸職人の日当が一・八匁とあります(註12)。また、上郡では同じ十二月の御巡廻道筋打人足の日当は一・二匁(註13)とあります。これらの上に、磯田道史の説(註14)を参考にして銀一匁は四〇〇

〇円とします(註15)。

とすると、総経費三貫七四六匁三五は一四九八万五四〇〇円に相当します。また赤字に対して一軒当たりが負担した九分四毛三七九は三千六一五円となります。念のため一軒当たり負担額は当時の米ではほぼ、一升にあたります(註16)。また高下村の支出覚(資料番号九)によると、巡廻当日の茶沸かしや先払いをした村民の日当は八分ですが、これをやや上回る額です。この負担額が一般の農民に過大な負担になるのかどうかは、貨幣経済の浸透度とか、現金収入のウエイトなどによって見極めることになると思われます。

五 準備とプロジェクトのまとめ

『覚日記』『差引帳』を中心にして庄家文書の関係史料を読み進むにつれ、村役人層の対藩意識の高さや、村役人の勝れた実務処理力と情報ネットワークについて認識を新たにしました。これらのことをまとめると、

第一は、村役人の藩との関わりの実態と意識、そこに看取される村役人の相対的自律性についてです。『覚日記』に登場する藩士は6名、日記にも藩庁の指示とする事項は少ない。筆者哲三郎の地位は郷方総代及び天文方御巡廻の道筋御案内御本陣用達(加生の善太夫と)であり、文字通り村方の代表格です。藩庁の指示が少ないのは関連情報を集め、対応の方途を策定し実施するなどの実務・イベント対応能力を信頼されていたからでしょうか。各村からの動員数、役割分担に始まり費用分担の計数処理、受け入れに係る緻密なシナリオに至るまで、現代の私達でも、これだけしようとすればなかなか

か大変だと思われれます。

第二は、負債処理に係る財務力です。一貫目を越す未決済金を四年後に郷町割合を決めて一気に精算するには、計画性と事態を分析する知性と、信念を持った実践力が要請されます。哲三郎(村役人)が名実共に地域のリーダーとしての責を果たしていたことを最終処理の仕方感じます。

第三は、農民の労務提供に対価をという考えが見られることです。公事への夫役にあたる測量機材運搬・くい打ち・梵天持ちなどの測量事務補助、お茶くみや先払、ほうき持ちなど事業支援業務に日当として八分を計上する緻密さ、または慣行としての成熟したやさしさ。雑用や情報収集者への飯・酒代を支出することに見られる大らかさ。『差引帳』の計数処理に見られるしたたかさと思いやりは後期封建社会における農民、とりわけ村役人層が生活者としての高い意識を持っていたことを示すと共に、村の役人として自覚的に行政事務をしていた証左とも考えられます。農民は領主に恣意的に無償で使われるのではないという認識が前提にあるように思うのは考えすぎでしょうか。

六 おわりに

十二月二十五日、測量隊の山崎泊の留意事項に「出火時の駆け付け人足三〇人、避難場所大雲寺」、高下の「覚」記録に、「湯沸かし三人・二匁四分」。資料を読んでいるとこの種の記述表現に出くわす。前者は、災害時の緊急避難と救援措置であり、後者は、測量隊へのお茶の用意をした人夫への日当です、災害時の不測の事態対

応はさることながら、寒中の屋外作業者へのお茶の用意はなかなかだ、更に二匁四分の日当が計上されているのもいい。百姓の公役負担たる労働が正当に評価されている。これが地域の「文化的基盤」といえるのではないか、こんなことを思いながら、楽しく小稿を終えることが出来ました。

註

- 1 伊能忠敬『測量日記』530頁 大空社1998年版
- 2 庄家文書の第8次測量隊関係文書から山崎古文書同好会が『伊能忠敬一行の山崎来藩』(資料) 平成十六年版を作成した。世話人横井時成氏、会員は多かつたが、森本一二、柳田弘(故人)、横井時成、浅田耕三、西川博敏(故人)、鎌田裕明、清水哲、大谷司郎、山部春子、北川泰子(故人)、田村るみ子の各氏が中心メンバーで、皆、明るく活動的で、学びを楽しむ懐かしい方々であった。小論の資料は、多くこの書から引用した。
- 3 塚本学『小さな歴史と大きな歴史』吉川弘文館 平成5年版
- 4 井上ひさし『四千万歩の男』講談社115巻 1997年版
- 5 この「先触」は、通行筋の村と宿の役人宛で「賄い方の木銭米代を支払う、一汁一菜の他無用」との文があり、官の旅行の範とすべきものであった。
- 6 久留島浩「百姓と村の変質」94頁 岩波講座日本通史近世5 むらじ地域管理能力が高くなると領主支配を相対化する95頁。
- 7 文化的基盤は「測量事業の成功には多くの①民衆の直接的な協力と労苦」があった(小島一仁「伊能忠敬」194頁。②共同体の規範を共有することにつながった村民 ③下部・上部構造の総体等、解釈が分かれている。

8 計算過程は左の通り。

総不足額 (1951・65) ÷ 総軒数 (2158) 〓
0・90437905
(一軒の負担額)
郷方負担額 0・904379 × 1654 〓 1495・14
町方負担額 0・904379 × 504 〓 455・807

9 総経費は左の通り。

文化10年12月まで 1・794匁7の補助金を払って
746匁82不足
文化14年12月までの赤字総額は 1・951匁65
従って総経費は 3・746匁35となります。

10 巡見使接待諸入用は『山崎町史』四七一頁に三八八匁八分(当時の米相場で四・八〜五石程度)とありますが、天保九年京都では春の米相場は、一石が一〇七匁(近世地方史研究入門・岩波全書一九六二年版三〇〇頁)なので三・六一石が正しいと思われます。この時の受け入れは藩が中心で、巡検三ヶ月前に道普請を行っています。

11 貨幣価値を現在の米価をもとにして換算すると、今日の米価が政策的に保護を受けていること、土地・労働生産性が高くなっていること、国際競争の圧力があることなどから換算の基本に据えることが適切でないと思われる。一両が一〇万円といわれているが、それが元禄の金貨か、正徳のものかで違いはあるとしても、労働価値による日当換算の一両が三〇〜四〇万円となると違いが大きすぎます。忠敬の研究者渡辺一郎氏は一両を一五万円に換算し、磯田氏や日本銀行金融研究所は日当計算をもとにして三〇万円としています。

12 『山崎町史』七一八頁には文政十二年の雇い人の賃銭として、上職人・諸職人は一・八匁、とあります。

13 『上郡町史』資料編一六〇頁 測量方御道筋間杭打ち人足一・二匁とある。安いのは公の事業なので低く抑さえられているとも考えられます。山崎で御巡廻の先払をした村人の日当八分を比較すると、仕事の質や時間更に山崎と上郡の相場の違いかなど検討の余地があります。

14 磯田道史は、『武士の家計簿』新潮新書〇三年版五五頁で、通貨の価値は①現代の賃金からと ②現在の米価からの二つの換算方式があるとして、天保十四年頃では、①によれば一両は三〇万円、②によれば五・五万円になると述べています。

15 磯田道史『前掲書』の五四頁で天保十四年頃、四〇〇円説を述べているが、藤田寛は『大江戸世相夜話』中公新書二〇〇三年版六五頁で一八三〇年代に一両は二〇万円(一匁は三三〇〇円)として論を進めている。勿論年代による違い(銀払いの米価が異なる)や観点の違いがあるのでいくらか幅を持って換算の問題は議論することが大切です。

16 『山崎町史』七一八頁で宝暦十年山崎諸式物価として米一升銭三一文、米一石が銀六四匁、一匁は六二文としています。文化十四年は米一石が八四・一匁(前掲近世地方史研究入門二九九頁)をもとに、一軒当たり負担金九分四毛三七九で買える米の量を計算すると二升買えることとなります。また、ここで見た統計資料は、①宝暦十年と文化十四年、この九十二年間の違いが物価騰貴・貨幣価値の下落を引き起こしている。②米の生産地と都市(この統計は京都)とは米価が異なることを示しています。

付記 「伊能忠敬研究会」で、「氷上郡の農民が拠出した金」、「赤穂城下での対応の記録」が発表されています。その成果にも学んでいきたいと思っています。

菅野川の外来植物

里見 亘

十九歳の春に、生まれたこの村を離れ、あちらこちらを転々として、八年前に終の住処を求めて郷里へ帰って来ました。

我が家の近辺で昔と変わったなと感じることは幾つかありますが、とりわけ大きく変わっていたのは、村を二分して流れる菅野川の景觀でした。河川改修工事により兩岸の竹藪を剥いで土手を築き、その上に道路を敷設したので、河の両側からの見通しが良くなり、峡の村ではありますが広々として心が安らぐ思いがしています。

私は、天気が良ければ、早朝に菅野川の土手道を散歩して四季折々に見せる村の風光の変化や草花、鳥たちの動向を楽しんでいます。

しかし、歩き始めて一年ほど経った頃でしょうか、ある種の違和感を覚えるようになりました。子供の頃、祖父に「お前は河童の生まれ変わりか」と揶揄されるほど菅野川を遊び場としていた私には、この川に棲息する動物や繁茂する植物について熟知していたつもりでいましたが、散歩をしているうちに多くの見知らぬ動植物たちが川の中や河川敷、土手などを占拠していることに気が付きました。

「お前は何者だ」と聞いても答えてくれそうもないし、かといって知らぬままに毎日のように出会うのも気持ちが悪く落ち着かないので、仕方なく散歩にカメラを持参し、馴染めない動植物が目にとまると撮影し、自宅へ帰って図鑑やネットで調べることになりました。

生物には全く疎い私には、「同定」という作業は困難なものであ

りましたが、不完全ながら一応の纏めができたので、大方のご教示を頂きたく、会報の貴重なページを割いてもらって発表しました。

なお、紙幅の関係上、各植物の説明や写真が割愛しました。これについては、徐々にブログなどで発表して行きたいと考えています。

(注1) 帰化植物とは、本来の自生地から人間の媒介などによって他の地域へ運ばれ、野生化した植物をいう(三省堂『大辞林』)が、江戸末期から海外との交易が激しくなると帰化植物は急増したので、一般的に帰化植物は江戸末期以降のものに限っているようである(明治以降とする説もある)。

(注2) 植物名の中の①は原産地②は日本へ渡来時期である。

双子葉植物(合弁花類)

キク科(十七種類)

◆アメリカセンダングサ(亜米利加梅檀草) ①北アメリカ原産

②大正時代

◆アラゲハンゴンソウ(荒毛反魂草) ①北アメリカ ②明治時代

◆オオキンケイギク(大金鶏菊) ①北アメリカ ②明治時代

◆オオオナモミ(大葉耳) ①北アメリカ ②昭和初期

◆オニノゲシ(鬼野罌粟) ①ヨーロッパ ②明治時代

◆キクイモ(菊芋) ①北アメリカ ②江戸末期

◆コシロノセンダングサ(小白の梅檀草) ①熱帯アメリカ

②明治後期

◆コセンダングサ(小梅檀草) ①熱帯アメリカ(北アメリカ説あり)

②明治時代に確認

◆セイタカアワダチソウ (背高泡立草) ①北アメリカ②明治末期

◆セイヨウタンポポ (西洋蒲公英) ①ヨーロッパ②明治時代

◆ダンドボロギク (段戸檻樓菊) ①北アメリカ②昭和初期に確認

◆ノボロギク (野檻樓菊) ①ヨーロッパ②明治初期

◆ハルジオン (春紫苑) ①北アメリカ②大正時代

◆ハルシヤギク (波斯菊) ①北米西部②明治初期

◆ヒメジヨオン (姫女苑) ①北アメリカ②江戸末期

◆ブタナ (豚菜) ①ヨーロッパ②昭和初期に確認

◆ベニバナボロギク (紅花檻樓菊) ①アフリカ②昭和二十五年九州で発見

オオバコ科 (一種類)

◆ツボミオオバコ (蕾大葉子) ①北アメリカ②大正末期

ゴマノハグサ科 (一種類)

◆オオイヌノフグリ (大犬の陰囊) ①ヨーロッパ②明治二十三年頃

頃

ナス科 (二種類)

◆ヨウシュチヨウセンアサガオ (洋種朝鮮朝顔) ①熱帯アメリカ

②明治始め

◆ワルナスビ (悪茄子) ①北アメリカ②昭和初期

シソ科 (一種類)

◆ヒメオドリコソウ (姫踊子草) ①ヨーロッパ②明治中期、東京

で確認

クマツヅラ科 (二種類)

◆アレチハナガサ (荒地花笠) ①南アメリカ②昭和三十三年頃確

認

◆ヤナギハナガサ (柳花笠) ①南アメリカ②第二次世界大戦後、

東海地方で確認

ヒルガオ科 (六種類)

◆アメリカアサガオ (亜米利加朝顔) ①アメリカ②明治時代

◆アメリカネナシカズラ (亜米利加根無葛) ①北アメリカ②昭和

四十五年頃確認

◆ホシアサガオ (星朝顔) ①北アメリカ②第二次世界大戦後

◆マメアサガオ (豆朝顔) ①北アメリカ②第二次世界大戦後

◆マルバアサガオ (丸葉朝顔) ①熱帯アメリカ②江戸時代

◆マルバルコウソウ (丸葉留紅草) ①熱帯アメリカ②江戸末期

キョウチクトウ科 (一種類)

◆ツルニチニチソウ (蔓日日草) ①南ヨーロッパ②明治時代

双子葉植物 (離弁花類)

アカバナ科 (四種類)

◆アカバナユウゲシヨウ (赤花夕化粧) ①北アメリカ南部から南

アメリカ②明治時代

◆アレチマツヨイグサ (荒地待宵草) ①北アメリカ②明治中期

◆コマツヨイグサ (小待宵草) ①北アメリカ②明治末期

◆マツヨイグサ (待宵草) ①南アメリカのチリ②江戸後期

マメ科 (三種類)

◆アカツメクサ (赤詰草) ①ヨーロッパ②明治時代

◆アレチヌスビトハギ (荒地盗人萩) ①北アメリカ②昭和十五年

大阪府で確認

- ◆セイヨウミヤコグサ (西洋都草) ①ヨーロッパ②第二次世界大戦後

アブラナ科 (二種類)

- ◆クレソン (和蘭芥子) ①ヨーロッパ②明治初め

- ◆マメゲンバイナズナ (豆軍配薺) ①北アメリカ②明治四十三年頃、神戸で採取

ケシ科 (一種類)

- ◆ナガミヒナゲシ (長実雛罌粟) ①地中海沿岸地方②昭和三十六年に東京世田谷で確認

ヤマゴボウ科 (一種類)

- ◆ヨウシユヤマゴボウ (洋種山牛蒡) ①北アメリカ②明治初期

単子葉植物

アヤメ科 (三種類)

- ◆キシヨウブ (黄菖蒲) ①地中海沿岸地方②明治時代
- ◆ニワゼキショウ (庭石菖) ①北アメリカ②明治時代
- ◆ヒメヒオウギズイセン (姫檜扇水仙) ①南アフリカ②明治二十三年頃

イネ科 (三種類)

- ◆カモガヤ (鴨茅) ①ヨーロッパ ②明治時代初期
- ◆アメリカスズメノヒエ (亜米利加雀の稗) ①熱帯アメリカ ②昭和三十一年頃
- ◆メリケンカルカヤ (米利堅刈萱) ①アメリカ②昭和十五年頃愛

知県で確認

(注) イネ科の植物の同定は、素人では難しく、漏れたものが多い (写真は、菅野川に外来植物の種を持ち込んだ鳥たち)



三森城跡 山麓に居館跡

竹内克司

交通の要衝に位置する中世初期の山城

三森城は宍粟郡の南東部（姫路市安富町）にあって東へは加西北条方面の古道、南へは安志川（林田川）沿いに姫路・竜野に至る街道があり、古くからの交通の要衝地点にあった。三森宇城山の標高二五〇メートル・比高一三〇メートルの山頂部に小さな曲輪跡と数段の削平跡が見られるが、自然地形に近い。戦国末期に見られる豎堀や堀切の跡がないため、中世初期の小規模な山城であるといえる。西側の安志川（林田川）に接した安志姫神社の宮山稜線部からの眺望はよく、安志坂上部や安志川流域が一望でき、城山と連携した見張り台によって、南麓の街道筋を押さえ、かつ安志庄内の動きを監視していたものと見られる。さらに三森城は狼煙のぶにより長水城と連絡していたのではないかとされている。頂上から尾根筋に少しばかり下ると狭い鞍部になった所に至る。そこに狼煙台があったという。今はその場所は送電線の鉄塔工事のため改変されている。三森から三坂（下河）そして三谷越しの切り通し北尾根に狼煙台が想定されているが、本当に狼煙台があったのかどうか、有事の際に狼煙が有効に使われたのか、その確証はない。

城主は三森近江守（伝承）

三森城の城主については、「赤松家播備作城記」には記載がなく、

ただ一つ宝暦五年（一七五五）の「播磨古跡考」佐用の岡田光佃に「三森古城 安志庄三森村に有り。三森近江守と云し人住之と云」とあるのが初見である。しかし三森近江守の名は赤松家臣団に見当たらない。この「播磨古跡考」が書かれたのは長水城が落城して一七五年後のことである。三森氏の存在を裏付ける手掛かりはない。

大手道に長い石垣を残す居館跡

三森城跡について、特筆すべきは城山の西南の高台で大手道ある場所（字坂口）に武士の居館跡の石垣が残っていることである。竹藪の中には野面積の石垣に区分けされた幅五メートル〜一〇メートル、長さ二〇メートル〜四〇メートルの屋敷跡が五段に及ぶ。

中世の時代は、山城の中腹や山麓に「根小屋」と呼ばれた居館があり、いざ合戦ともなれば相手の軍勢によって少数であれば野戦を選び、多数の場合は山城に立て籠もり応戦していたようである。

赤松家の弱体化と宇野氏の離反

天文七年（一五三八）に出雲の尼子氏が播磨に侵攻し、備前・美作・播磨の守護赤松晴政（置塩城主）はその侵攻を食い止めることでもできず敗走し、播磨は大混乱に陥った。尼子氏が本国で毛利氏との闘いに敗れ播磨を撤退すると、今度は赤松重臣の浦上氏が台頭し、赤松を牛耳る動きに出た。こうして十六世紀半ば以降赤松家の勢力は一武将ほどに低下していった。

天正五年（一五七七）織田信長の命により羽柴秀吉の中国制圧で、置塩城（夢前町置塩）の赤松惣領家最後の当主赤松則房は、秀吉の

軍門に下り、播磨攻めに加わった。天正八年（一五八〇）四月秀吉の宇野攻めに安積・田路両氏を指揮している。

戦国末期宇野氏は「織田か毛利か」の決断をする以前に、主家赤松氏から離反し敵対状態であったため、夢前・林田につながる街道筋は常時緊迫した状況であったと考えられる。

そこで置塩から安志には三坂ルートがあることに注目している。

三坂は宍粟郡と飾西郡の郡境に近く、その峠への道に「木戸口」という小字地名が残されている。それはおそらく夢前町護持ごじにつながる街道の見張りの門があったのだろう。ゆるい峠を越え下って行くと奥護持の西谷口に至る。そこには赤松置塩城防衛の護持構居跡がある。則房が宇野征伐にこの護持峠越えの最短ルートを利用したことは十分考えられる。

三森の居館跡は中世遺構として貴重なもの

三森城は宇野氏と主君赤松氏の臣下の関係が良好であるときは不用品なものであったが、戦国後期ににわかには宇野氏は配下の者をして三森と三坂を守らしていたと推測される。

宍粟郡を支配していた宇野氏の本城長水城や篠ノ丸城の山麓には城主の居館跡や菩提寺、政治を行う政庁があったと思われるが、近世の町場化と四〇〇年以上の長い年月にほとんどが跡形もなく消失してしまった。その中であって三森に残された居館跡は宇野氏ゆかりの中世遺構として貴重なものと理解している。

参考：『安富町史』、『播磨国宍粟郡広瀬宇野氏の資料と研究』



頂上曲輪跡



全景



石垣跡



大手道

地区の
話題

ふるさと神野を考える会の活動

・笑顔あふれる神野地区に・

代表 山本高則

神野地区住民が、『みんなが“輪”になってつながり、みんなが“なごみ(和)”楽しい日々を過ごす』という願いを込め、情報誌「輪・和かんの」を発行しています。

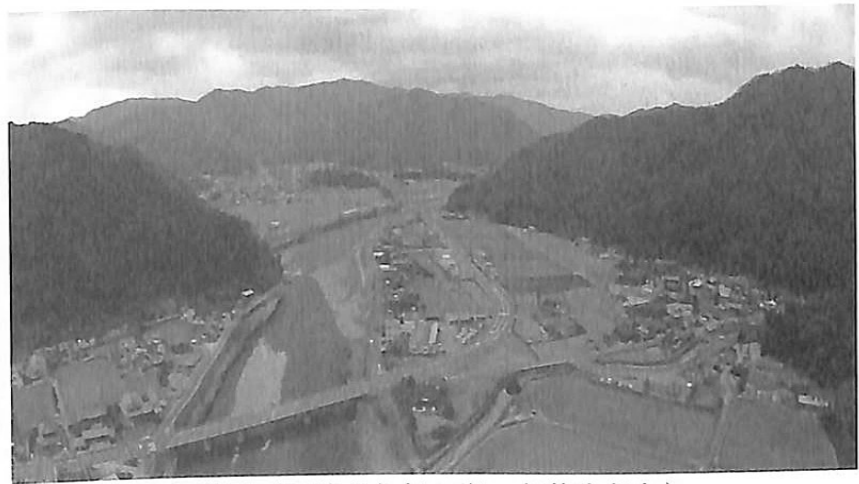
平成二十五年六月に初会合を行い、毎月一回の定例会を公民館持ち回りで開き、ワークショップを積み重ねて運動を続けています。

まず地区内をメンバー全員が地域を知る為、“有るもの探し”を行い、その由来や背景の学習を重ね、散策マップ「神野散歩」の発刊し、地区内全戸配布と観光案内所等々でPRを行い、多くの人に知ってもらい、又、外部からも来てもらい、活気ある地区づくりを目指しています。

昨年八月「よいウオーク」、九月「きてーなあ神野 洞門・あゆまつり」のイベントを行い、地区内外から多くの参加があり、楽しいひとときが過ぎました。初イベントで、反省点や課題は次へのステップへつないでいきます。

史跡『長水城』を後世につなぐため、学習を重ね、登山道の補修やもみじの植栽も行い、今秋の十月三十日には『長水城まつり』をやろうと、計画し討議を重ねています。

国道二十九号の沿線の活性化についても、鳥取県も含め、仲間づくりと交流を図っています。



神野（田井より杉ヶ瀬、与位を望む）

ご支援とご指導をお願いいたします。



段の観音堂の絵馬伝説の現地調査

片山 昭悟

平成二十七年九月一日（火）の午後〇時頃に小雨の中調査をする。雨に濡れて石段を登るのに苦労した。

これまで段の観音堂の調査については、梵鐘の調査で訪れたことがある。御大師堂の梵鐘調査もしたことがある。大正時代の鐘で、山崎郷土研究会報に大正時代の喚鐘として紹介させていただいた。

河本雅視先生が山崎郷土研究会報一二四号に「段の観音堂の絵馬伝説について」を紹介されています。

九月一日に段の観音堂の絵馬のことが話題になり、これまで詳しく調査したことが無く、自分の目で確かめておこうと思ったからでもある。

段の観音堂の調査

段の国見山の尾根の山裾に位置する。絵馬堂があり、本殿がある。石段を登る途中に御大師堂がある。石段を登り切ったところに絵馬堂の天井に墨で描かれた龍の絵（写真1）がある。

向かって右の西裾に年号と作者が書かれている。

「正徳五乙未歳□夏 桑田氏常之画」
本殿のほうから見るようにかけられたので

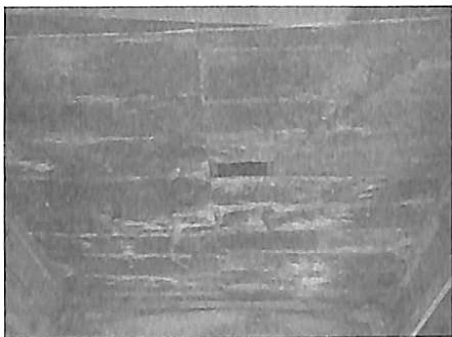


写真1

あろうと思われる。

正徳五年は一七一五年で、夏の早魃のときに龍の絵を描いて雨乞いの祈願がされたのではないかと考えられます。

観音堂は江戸時代後期に山崎藩主の本多家の祈願所であったことから山崎藩の馬術師範であった桑田氏常が龍の絵を描いたのである。龍の絵を描いて雨乞いの祈願がされたのではないかと考えられる。（写真2）は（写真1）を拡大したものである。

正徳五乙未歳□夏 桑田氏常之画（写真2）



写真2

観音堂の梵鐘の調査

石段を登った左に鐘楼があり、梵鐘（写真3）が釣り下がっている。昭和三十六年三月のもので、寄付された方々の名前が刻まれている。本堂の本尊は十一面観音菩薩像で、梵鐘の寄付された氏名が墨で木に書かれている。



写真3

御大師堂の喚鐘調査

観音堂の石段を少し登った右手にある大師堂の喚鐘は、昭和三年（一九二八）四月の鐘で現存する。山崎本町小針氏が寄進されている。数少ない昭和初期の現存する貴重な鐘である。

観音堂からは、城下平野が一望でき、国見山が西方にそびえる。

金谷から見る国見山とは少し異なった信仰の山の趣を感じる。

段 観音寺の石碑 (写真4)

観音寺の御本尊は、十一面観音でお堂・観音像共に年代は定かでないが、江戸初期金蔵坊と言う修験者が堂守をしていたという。

また、隣接地の春安には円明院と言う天台宗の寺が在り、山崎歴代藩主の祈願所であった。本多氏では、この寺を「成就院吉祥山願行寺」と称し観音寺と共に祈願所となし信仰していた。

願行寺は、明治初年廃仏毀釈により廃

寺となった。

平成十一年十月吉日 山崎郷土研究会

段の観音堂でたたらふみ

段の観音さん近くの池の下(写真5)で、梵鐘を鑄造するために当時たたら踏みをされたことをかつてお聞き

したことがある。昭和十年代で山崎町内はじめ郡内の小学校の生徒が参加されたようである。当時製作された梵鐘は、戦争で供出されて現在鐘楼に釣り下げられている梵鐘は、昭和三十六年(一九六一)三月のものである。山崎町の城下から河東の須賀一帯を一望できるところで、鐘の音は遠くまで響くものと思われる。



写真4



写真5

比地金谷条里の遺構 (写真6)

比地金谷条里の遺構の石碑がどこに建てられているのかわからなかったが、山崎南中学校の南であることから、現地調査を平成二十七年八月三十日に行ってみた。

石碑が建てられているところは、中比地字市ノ坪の市道南側溝際で、中比地のゴミステーションの直近の位置であった。「比地金谷条里の遺構」と刻まれている。建てられていたときは、長地式地割が残っている場所で、ほ場整備が終了していたことからこの場所であったのであろう。

山崎南中学校の位置は、金谷であり、金谷も条里が残っていたことから入れられたのであろう。「比地条里」として「兵庫県遺跡地図」には登録されている。



写真6

御大師堂の喚鐘 (写真7)(写真8)

昭和三年(一九二八)四月の鐘で山崎本町小針氏が寄進されている。



写真7



写真8

「旧因幡街道」の石柱について

会報部

東側に「願主 小村屋彦七
綿屋理兵衛」

江戸時代の寛政九年（一七九七）三月の今から二一九年前の道標です。

平成二十八年七月九日の午前十時三十分「旧因幡街道」の石柱について現地調査をおこなったので、調査の概要を紹介する。

山崎町山田の国道二十九号線の東側に位置する。

石柱は道標の東に昭和五十一年十二月、山崎郷土研究会と山崎町で建てられている。

石柱の内容については、次のとおりである。

「山崎は古来、山陰・山陽を結ぶ最も主要な地点で、今日の国道二十九号線は、昔、因幡街道といわれたコースである。鳥取から南下して、東和通りを総道神社から東に折れ、ここから又東へ、須賀の渡しを渡って、安志、林田を経、姫路へ達した。

寛政九年の道標の調査について

南側に「寛政九（一七九七）丁巳歳三月日」

西側に「右 志ん宮 あほし

たつの むろつ 道」

北側に「左 あんじ ほふでう（北条）」

はやし田 ひめぢ 道」



石柱と道標

写真道標 1 右 志ん宮 あほし たつの むろつ 道
写真道標 2 左 あんじ ほふでう はやし田 ひめぢ 道
写真道標 3 寛政九丁巳歳三月日

『山崎町史』によると、高さ五尺（約一・五メートル）、方九寸（約二七センチ）で、青蓮寺日涼上人の筆とされる。（p723）もと稲垣神社前に在ったとされる。（p1299）



道標 3



道標 2



道標 1

宍粟市の梵鐘（江戸時代）年代順集成（Ⅱ）

片山昭悟

32 山崎町上寺 大雲寺の喚鐘（現存する）

明和八年（一七七二）

33 山崎町大沢 円通庵の喚鐘（現存する）

安永三年（一七七四）春甲午（きのえうま）三月日

冶工同国同郡金屋村

長谷川孫兵衛藤原吉正

34 山崎町下牧谷 大倭物代主神社の梵鐘

『兵庫県神社誌』によると、

天明三（一七八三）歳壬寅（みずのえとら）之夏四月八日

冶工 金屋邑住

長谷川孫兵衛尉藤原吉則作

*貞享二（一六八五）乙丑（きのとうし）二月 日

先鐘之年號

35 波賀町安賀 満願寺の喚鐘（現存する）

天明六（一七八六）丙午（ひのえうま）歳十二月

冶工 當国當郡住

長谷川氏藤原吉則

36 山崎町船元 一雲寺の喚鐘（現存する）

寛政元年（一七八九）酉（とり）曆十月九日

冶工當郡住

37 一宮町上岸田 仏心寺の釣鐘

寛政五年（一七九三）三月

播磨国宍粟郡岸田村（現宍粟市一宮町上岸田）仏心寺において京三条釜座和田吉兵衛が現地で釣鐘を鑄たが、宍粟郡は金屋村鑄物師の長谷川孫兵衛が居ることから、京三条釜座和田吉兵衛と争論になり、和田吉兵衛の釣鐘を封印して土中に埋めたとされる。この一件は鑄物師に掟を守るよう触れ書きを出している。

38 千種町千草 長永寺の鐘

「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると

千時 寛政六年（一七九四）甲寅（きのえとら）四月朔日

勅許 御鑄物師

當郡金屋之住

長谷川孫兵衛藤原吉則

長谷川五良兵衛藤原家次

39 一宮町公文 實際寺の鰐口（現存する）

寛政六年（一七九四）寅（とら）曆

現住學海代

世話人落忠右衛門

公文邑 實際禪寺

40 一宮町西公文 西公文薬師堂の鰐口銘（現存する）

寛政六歳（一七九四）寅（とら）八月大吉日

播磨国宍粟郡三方公文邑

川上大明神 惣氏子敬白

41 一宮町福知 成観音堂の鰐口銘（現存する）

完栗郡福知村氏子中

干時

寛政七（一七九五）卯（う）二月吉日

（径三十七センチ）

*實際寺鰐口の次の年

福知藪の荒神社には松樹遊鶴鏡（平安時代）

42 姫路市安富町塩野 了円寺の喚鐘（現存する）

寛政九（一七九七）丁巳（ひのとみ）歳二月 日

冶工 同郡住

長谷川孫兵衛藤原吉則

*姫路市安富町塩野であるが長谷川氏のものであり紹介する。

43 山崎町小茅野 位尾神社の梵鐘（現存する）

寛政九（一七九七）丁巳（ひのとみ）三月再鑄之

勅許 冶工 當郡住

長谷川孫兵衛尉藤原吉則

44 一宮町西深 葉師堂の鰐口銘（現存する）

寛政十二（一八〇〇）申（さる）七月

森氏因州鳥取之住

藤原丹波守正次

45 波賀町上野 上野井之谷の半鐘（現存する）

播州完栗郡西谷

上野村山田井ノ谷山

行者大菩薩半鐘

姫路 冶工 瀬川安右エ門藤原正明

寛政十二（一八〇〇）庚申（かのえさる）十月吉辰

46 山崎町川戸 道場元の喚鐘（現存する）

享和二（一八〇二）壬戌（みずのえいぬ）之冬

勅許御鑄物師當郡金屋之住

長谷川氏藤原吉則

*長谷川氏は文化五年（一八〇六）の満福寺喚鐘と文化十四

年（一八一七）の徳王寺喚鐘がある。

いずれも長谷川氏とあるのは、長谷川孫兵衛藤原吉則である。

47 一宮町百千家満 満福寺の喚鐘（現存する）

文化五年（一八〇六）戊辰（つちのえたつ）年七月吉日

冶工 同郡金屋住

長谷川氏藤原吉則

48 山崎町中野 徳王寺の喚鐘（現存する）

文化十四年（一八一七）

勅許御鑄物師

同郡住金屋村

長谷川氏藤原吉則

49 千種町室 西方寺の喚鐘（現存する）

維時 文政十一年（一八二八）仲冬

*仲冬は陰暦の十一月

50 一宮町百千家満 常楽寺の喚鐘（現存する）

文政十二年（一八二九）己丑（つちのとうし）晚秋

賣元 姫路龍野町三丁目 油屋岩蔵
播州完栗郡三方庄

百千家満邑

不変山常楽寺 什物

51 佐用町上三河 光福寺の喚鐘（現存する）

天保二年（一八三二）

當國宍粟郡住

勅許 左方惣官御鑄物師

長谷川孫兵衛藤原恒光

*佐用町上三河であるが、長谷川氏のものであり紹介する。

*左方惣官とは鑄物師の名称。

*山崎町岸田の明宝寺鐘は、

天保四年（一八三三）長谷川孫兵衛藤原恒光

52 姫路市安富町安志 光久寺の喚鐘（現存する）

天保十年（一八三九）己亥（つちのとい）九月吉日

勅許 鑄物師

長谷川孫兵衛

福岡休作

*姫路市安富町であるが長谷川氏のものであり紹介する。

53 一宮町森添 御形神社の鐘

天保十三年（一八四二）四月二十一日

孫兵衛代理の伊三郎

*天保十一年（一八四〇）十月 長谷川五郎兵衛から

段村の松井太郎大夫氏に鑄物師の権利が移っている。

54 一宮町上岸田には、鐘鑄場（かねば）という小字がある。

垣尻の御大師堂に小さな鐘がある。（現存する）

「清雲山法泉庵 上郡 中井幸右衛門」

55 千種町 仙光寺の喚鐘（現存する）

天保十五年（一八四四）甲辰（きのえたつ）二月日

播磨国宍粟郡西山村

文殊山仙光寺

売所 龍野町三丁目

あぶらや岩蔵

*常楽寺の喚鐘も

文政十二年（一八二九）己丑（つちのとうし）晩秋

賣元は姫路龍野町三丁目の油屋岩蔵で

常楽寺の喚鐘と同じところである。

56 山崎町岸田 明宝寺の鐘

天保四年（一八三三）長谷川孫兵衛藤原恒光

安政元年（一八五四）大砲鑄造のため差し出している。

*安政三年（一八五六）三月 ペリー日米和親条約

*安政三年三月海防のため寺院の梵鐘を差し出す

59 山崎町中野 光明庵の喚鐘（現存する）

安政二年（一八五五）二月

60 山崎町高下 法伝寺の喚鐘（現存する）

享保十七年（一七三二）初鑄

弘化四年（一八四七）二鑄

文久元年（一八六一）三鑄

会員・家族の文芸

◎冠 句

- | | | | |
|----|--|------------------|-------|
| 61 | 一宮町 三方東横山村観音寺の鰐口
嘉吉元年（一四四二）辛酉（かのととり）六月吉日敬白
尼崎市寺町の長遠寺にあるとされるが、現在は不明である。 | その昔 峠の地藏目印に | 大谷 志路 |
| 62 | 姫路市安富町の梵鐘（もと宍粟郡である）*長谷川氏以外の鐘
姫路市安富町柝原 正源寺の喚鐘（現存する）
明治三十六年（一九〇三）八月鑄替
鐘銘によると、正徳四年（一七一四）である。 | その昔 学びし街を友と往く | 嶋津 千里 |
| 63 | 姫路市安富町名坂 今念寺の喚鐘（現存する）
享保九年（一七二四）甲辰（きのえたつ）年二月吉日
「完粟郡安志庄名坂村」天台宗寺院 兵庫県指定文化財石造五重塔 | その昔 栄華の名残城下町 | 坂本 忠彦 |
| 64 | 姫路市安富町長野 安養山真光寺の喚鐘（現存する）
宝暦十二年（一七六二）九月
冶工 菅原安欲
菅原安欲は大坂の鑄物師 | その昔 この地が狩場桓武さん | 実友 勉 |
| 65 | 姫路市安富町 妙福寺の喚鐘（現存する）
姫路田中鑄之
維時 弘化（一八四五）己巳（つちのえみ）年秋八月八日
播州三木郡吉田村妙覚寺什物 | その昔 陽だまりの中墓石付つ | 谷笹 まや |
| | | その昔 青春の日々振り返る | 三木ひづる |
| | | その昔 素足にぞうり遠出する | 中瀬 公三 |
| | | 平行線 わかり会える日きつと来る | 大谷 志路 |
| | | 平行線 年を重ねて義母の真似 | 嶋津 千里 |
| | | 平行線 人口減と高齢化 | 坂本 忠彦 |
| | | 平行線 沖繩の基地国と県 | 実友 勉 |
| | | 平行線 気になる年を歩き過ぎて | 谷笹 まや |
| | | 平行線 広くて青い海と空 | 三木ひづる |
| | | 平行線 ツバメすいすい空を飛ぶ | 中瀬 公三 |

◎俳句

墨象の墨の掠れや風光る

京屋 伊助

名刹の林泉寂びて蟬時雨

田中 慶英

墨痕にはつかの青や春衣

京屋 伊助

丹の鳥居奥社の黙や夏木立

田中 慶英

春浅し遅れがちなる古時計

杉山美保子

秋空を独り占めして鳶一羽

西嶋 忠義

木道を譲り譲られ秋の山

杉山美保子

三千の灯笼照らす刈田かな

西嶋 忠義

紫陽花のざらつく心打ちけされ

高井 麗子

稜線の城跡ほかす梅雨けむり

速水美知代

花菖蒲位置定まりて凜と咲く

高井 麗子

法城の薔薇の匂ひや奥の院

速水美知代

種を蒔く姑の残せし農事メモ

田中 良子

顔を見るだけの見舞や濃紫陽花

宗平 圭司

麦笛や疎遠となりし友如何に

田中 良子

異国へと海を跨ぎし天の川

宗平 圭司

脱藩の土佐街道や雲の峰

田中 慶英

氏宮の祝詞終りて蟬しぐれ

矢野登次郎

残照の山寺の鐘や秋の暮れ

田中 慶英

煩惱に振り回されて敬老日

矢野登次郎

斑雪日陰に残し暮れにけり

鳥羽チエノ

摘みし手に香り残れり露の臺

高井 智代

万緑の中水行の女かな

里見 和樽

畑荒し蔓延りやまぬ滑草すべりびら

高井 智代

大鎌に錆の浮きたる残暑かな

里見 和樽

子育ての上手な番夏燕

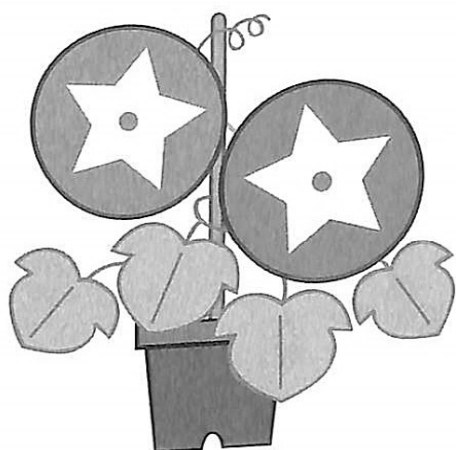
三浦 ゆき

緑陰によりて瀬音に癒さるる

三浦 ゆき

音低く流し老舗の雛の曲

鳥羽チエノ



平成二十八年研修旅行のご案内

研修部

事務局だより

日時 九月十八日(日) 午前八時集合出発

午後七時頃帰着(予定)

平成二十八年年度の通常総会が開催されました。

集合場所 宍粟市役所玄関

記

行先 NHK大河ドラマ「真田丸」ゆかりの地を訪ねて

和歌山県九度山(くどやま)町

日時 平成二十八年四月十六日(土) 午後二時より

(真田のこころの生きる郷)

場所 宍粟防災センター四階研修室

真田ミュージアム、真田庵

議事 一、平成二十七年事業報告について

真田宝物資料館、真田古墳(真田の抜け穴伝説)

二、平成二十七年会計報告について

大阪

三、平成二十八年度事業計画について

真田丸の一部(三光神社) 幸村最後の地(安居神社)

四、平成二十七年会計予算について

参加費 一人 金七五〇〇円(昼食を含みます)

以上の各議案は承認されました。

申込方法 九月一日より十二日まで、神姫バス山崎待合所北の

神姫観光山崎案内所へお願いします。

総会終了後、記念講座として、DVD「宍粟の城跡と黒田官兵衛改訂版」を鑑賞しました。

時間は、午前十時から午後三時まで。土・日・曜祝日は休みです。会員の家族の参加も可能です。

詳細は、八月発行の会報第一二七号に挿入の

パンフレットをご覧ください。

パンフレットをご覧ください。

*今回の研修旅行は、九度山町の真田のゆかりの地を訪れます。多くの参加をお願いします。

編集後記

『山崎郷土会報 第一二七号』をお届けします。

A4サイズになって三回目の号です。

『山崎郷土会報 第一二七号』は、原稿を書いていたいただいた会員の皆様のご協力により発行することができました。いずれも大変貴重な原稿です。是非とも御覧いただきたいと思います。

それからNHK大河ドラマの「真田丸」を楽しみに見られておられることと思います。九月十八日の研修旅行は、九度山町の真田のゆかりの地を訪れます。

なお、山崎は本多平八郎忠勝の子孫の本多氏の地であります。

立葵の軒丸瓦や徳川家康の兜(かぶと)があることを知っておられると思います。本多氏は大和郡山から延宝七年(一六七九)に一万石で入部し、明治四年(一八七二)まで続きましたが、それを支えていた米を作る人がいたということも忘れてはならない。

鹿沢の地にはじめて城を築いたのは、元和元年(一六一五)で、姫路城池田輝政の四男である池田輝澄です。

篠の丸を玄武、揖保川を青竜、菅野の谷を白虎、城下平野を朱雀として四神を考えた城で、因幡や美作、山陽、播磨を結ぶ交通の要衝です。

司馬遼太郎は山崎のことについて、『街道をゆく九』一九七七「播州揖保川・室津みち」で、「因幡とのさかいつづく宍粟(しろう)郡の山崎まではいっていない。そのころ、山崎にいないことが絶えず気になっていた。……山崎という地名は、おそらく

山なみの先端という地勢から出たものに相違ない」と紹介されていて、山崎を特別な思いをもって期待され、歌人の安田青風さんの息子さんの章生さんと須田剋太画伯と山崎を訪れています。

鹿沢城跡を訪れ、当時は山崎小学校になっていて紙屋門が校門と成って内堀もあつたことを紹介されています。

江戸時代の池田氏から今まで四〇〇年が経ちましたが、鹿沢城の絵図が公益財団法人山崎本多藩記念館や岡山大学附属図書館にも残っています。また、城の様子を知る貴重な写生図が山崎歴史郷土館にあります。城下町として町並みを活性化することも大切ですが、絵図を活用した鹿沢城の整備ができたらと心から願う。

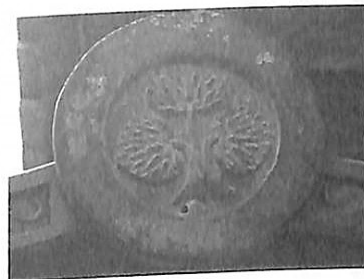
なお、本文中の

原稿は原文のままを尊重し編集しています。

(片山昭悟)



紙屋門



立葵軒丸瓦



内堀跡



北隅の角櫓跡と石垣


いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL (0790) 62-0371
FAX (0790) 62-0371

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御送物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

 御菓子司  さつき

本店：播州山崎町山田 (電) 62-0160

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

- 山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

ブックランド店 本店(文具部)
山崎町中井 山崎町中井
TEL (64) 2051・FAX (64) 2052 TEL (62) 0700・FAX (62) 2117

<http://www.yasuisyoten.co.jp/>



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

まごころを伝えます。

一献献上 品質本位 地酒

一播 献州

山陽 盃 陽

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyohai.com HP <http://www.sanyohai.com>